The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評会報告>櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武編『アジアの社会参加仏教 : 政教関係の視座から』趣旨説明と本書の紹介
Author(s)	大谷, 栄一
Citation	宗教と社会貢献. 2015, 5(2), p. 101-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53824
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武編『アジアの社会参加仏教――政教関係の視座から』（北海道大学出版会、2015 年）書評会

趣旨説明と本書の紹介

大谷栄一*
OTANI Eiichi

1. はじめに

「宗教と社会貢献」研究会では、2015 年 5 月 9 日（土曜日）に國學院大学渋谷キャンパスで 2015 年第 1 回研究会を開催し、櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武編『アジアの社会参加仏教――政教関係の視座から』（北海道大学出版会、2015 年）の書評会を開催した。本稿は、その記録である。

登壇者は、以下の通りである（敬称略）。

評者：ランジャナ・ムコパディヤーヤ（デリー大学）、伊達聖伸（上智大学）

編者：櫻井義秀（北海道大学）、外川昌彦（広島大学）、矢野秀武（駒澤大学）

司会：大谷栄一（佛教大学）

この「書評会報告」では、大谷の趣旨説明と本書の紹介、ムコパディヤーヤ氏と伊達氏のコメント、両者のコメントに対する櫻井氏、外川氏、矢野氏のリプライを掲載した。なお、書評会に先立ち、社会参加仏教（Engaged Buddhism）研究の専門家であるムコパディヤーヤ氏には仏教と社会貢献、社会参加仏教研究という観点から、フランスのライシテ研究を専門とする伊達氏にはフランスのライシテ、欧米の政教関係研究という観点から、コメントを頂戴できるよう、大谷が依頼した。

当日の書評会での緊張感あふれる評者と編者のやりとりの一端を再現す

* 佛教大学社会学部・准教授

ることで、読者に本書の特徴やその学術的意義を感じ取っていただければと思う。

2. 趣旨説明

2.1 本書の目次

まず、本書の目次を紹介しておこう。

はじめに　　櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武

第Ⅰ部　東アジア
第 1 章　東アジアの政教関係と福祉――比較制度論的視点　櫻井義秀
第 2 章　近代日本の政教関係と宗教の社会参加　小島伸之
第 3 章　妹尾義郎と新興仏教青年同盟の反戦・平和運動　大谷栄一
第 4 章　現代中国の宗教文化と社会主義　長谷千代子
第 5 章　チベット問題をめぐる宗教と政治――ダライ・ラマの非暴力運動との関わりから　別所裕介
第 6 章　戦後台湾の社会参加仏教――佛光山を事例に　五十嵐真子
第 7 章　韓国の政教関係と社会参加仏教の展開　李賢京

第Ⅱ部　東南アジア
第 8 章　東南アジアの政教関係――その制度化の諸相　矢野秀武
第 9 章　タイにおける国家介入的な政教関係と仏教の社会参加　矢野秀武
第 10 章　タイの「開発僧」と社会参加仏教　櫻井義秀
第 11 章　ミャンマーの社会参加仏教――出家者の活動に注目して　藏本龍介
第 12 章　ベトナムの政教関係――戦争と社会主義の下で　北澤直宏
第 13 章　インドネシアの政教関係と仏教の展開　蓮池隆広

第Ⅲ部　南アジア
第 14 章　南アジアの政教関係――宗教とセキュラリズムの相克　外川

昌彦
第 15 章　スリランカの民族紛争と宗教――ソーシャル・キャピタル論の視点から　田中雅一
第 16 章　近現代インドの仏教に見る「社会性」――B・R・アンベードカルの仏教解釈から現代インドの仏教改宗運動まで　舟橋健太
第 17 章　バングラデシュの政教関係とマイノリティ仏教徒　外川昌彦
第 18 章　政治的締めつけと文化的創造力――ネパール在住チベット難民ポップ歌手と仏教　山本達也

あとがき　櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武

以上のように、本書は 3 部構成からなり、各部の最初には編者によって各地域の政教関係の特色と基本的な宗教情報（宗教人口、政教関係、現代の宗教情勢）が掲載されており、各章を読む読者の理解を助ける役割を果たしている。

2.2 本書の成立背景と意図

本書は、「宗教と社会」学会創立 20 周年企画として行われた 2 つのテーマセッション（第 20 回大会での「社会参加を志向する宗教の比較研究――エンゲイジド・ブディズム（社会参加仏教）を考える」2012 年と第 21 回大会での「国家介入的な政教関係の近代――アジア諸国における宗教と政治の比較研究」2013 年）をもとに編まれた（「あとがき」参照）。なお、本書の詳細な成立過程については、櫻井氏のリプライを参照されたい。

2 つのテーマセッションは、日本宗教の研究者と世界各地の諸宗教を研究している文化人類学者や地域研究者がそれぞれの専門領域を越えて議論を交わせる場として企画され、両テーマセッションのアプローチがそのまま本書にも継承されている。

本書を編んだ編者たちの意図は、次の発言に明示されている。

「市民社会の成熟度や福祉・経済の発展状況、政教分離のあり方や度合いも全く異なった、その意味での複線化した近代を体現している諸

国家を比較しながら、各地域における仏教の社会参加だけでなく、その宗教が置かれている社会状況、さらにそれらを捉える各地域の宗教研究のあり方が、ずれを伴いながらところどころ重なり合っていく、その様子を可能な限り記述しようと努めた。」（389 頁）

本書のもう一つの意図は、「アジアの宗教を考える際に、東アジア、東南アジア、南アジア、西アジアにおける基本的な宗教情報（宗教人口、政教関係、現代の宗教情勢）を盛り込んだテキストを作」ることである（389 頁）。日本では類書がないので、今後、本書が学生や一般読者に対するアジア仏教を学ぶための教科書の役割を果たすことは間違いないであろう。

2.3 本書のテーマ

では、次に本書のテーマを確認しよう。それは、編者三人による「はじめに」の中で「1　社会参加仏教（Engaged Buddhism）について」「2　宗教の社会活動と政治」「3　アジアの政教関係と国家の介入」という 3 点から示されている。以下、その要点を確認しておこう。

2.3.1 社会参加仏教（Engaged Buddhism）について

まず、本書タイトルの「社会参加仏教」について説明されている。「社会参加型の仏教として紹介される“Engaged Buddhism（エンゲイジド・ブディズム）”は、世俗化した市民社会における仏教の社会貢献の可能性として注目されている」（ⅰ頁）と編者たちは指摘し、“Engaged Buddhism”を「社会参加仏教」と日本語訳したランジャナ・ムコパディヤーヤの定義を紹介する。ムコパディヤーヤのいう「社会参加仏教」とは「仏教者が布教・教化などのいわゆる宗教活動にとどまらず、様々な社会活動を行い、それを仏教教義の実践化とみなし、その活動の影響が仏教界に限らず、一般社会にも及ぶという仏教の対社会的姿勢を示す用語」である。

ただし、この“Engaged Buddhism”は欧米・非欧米の研究者、運動の当事者などによって多様な意味で用いられているため、本書では、「対象を特定の事例には限定せずに、アジアの多様な地域社会の文脈に位置づけられた実践例を通して、「社会参加」の視点が切り開く様々な可能性を明らかにしたいと考えている」（ⅱ頁）、と本書の立場を明示している。

そうした可能性を明らかにするために編者たちが採った指針は、社会参

加仏教とされる各地の事例を、①地域社会や政治状況における社会参加の過程として位置づけ、②その影響の広がりを多様な社会的文脈を通して検証し、③それを通して宗教の社会参加の可能性を明らかにする、という観点だった。

また、編者たちは「仏教」や広い意味での「宗教」が「社会」に参加するということは、社会の外にある「宗教」があらためて「社会」に参加するという意味を持ち、「「宗教」の社会参加を問うことは……近代の市民社会における「宗教」の位置づけを問うことにつながる」（ⅱ頁）と述べる。近代における「宗教」の私事化、「宗教」概念をめぐる問題、私的領域と公的領域の関係、宗教と公共性の問題、近代と宗教の関係等、近年の宗教研究における重要な問題系が意識されていることは明白である。

こうした問題系を、編者たちは以下の 3 つの論点に集約し、本書が仏教の社会参加に注目する意図を整理している。本書が最先端の宗教研究とリンクしていることが理解できるであろう（ⅱ～ⅶ頁）。

①近代と仏教（社会参加仏教は近代的な現象かどうか）
②「宗教」の境界（世俗化や脱私事化のアジアへの適用、私的領域／公的領域の区分）
③市民社会と社会参加仏教の関係（市民社会の多様な争点を形成する境界的な領域への宗教の関与）

2.3.2 仏教の社会活動と政治

本書は、さまざまな地域の「アジアの社会参加仏教」を「政教関係の視座」から比較分析している点に大きな特徴がある。宗教の社会参加が制度としての政教関係に規定されており、社会関係・制度論の水準で宗教の社会参加を理解することの必要性を強調している。その際、「当該の宗教運動がその社会でどのような社会的機能を担うことが政治的機会構造で許容され、一般市民に期待されてきたのを比較検討することが重要である」（xi頁）ことを指摘している。アジア各地域の政教関係と政治的機会構造への注目は本書を一貫している。

2.3.3 アジアの政教関係と国家の介入

くわえて、本書に特徴的なのが、西欧近代と異なるアジア諸地域の市民

社会の形成過程や政教分離のあり方への考慮である。つまり、西欧近代を理念型とした「政教分離的な要素の強い社会を前提とした宗教研究の諸理論は、時としてこれらの国々の実態にそぐわないことも多いと思われる」（xii頁）として、アジア諸地域における政教関係の多様性を以下の論点から問い直すことを掲げている（xii～ｘiv）。

①国家が掲げる宗教的理念（国家が自ら宗教的活動の一翼を担っている状況がある）
②世俗主義による宗教への介入（世俗主義の国家が様々なかたちで政教関係に介入してくる）
③宗教の公的役割をめぐる諸解釈（各国の宗教的な、あるいは反宗教的な体制理念からの宗教に対する影響性と、宗教の持つ公的役割＝社会秩序観の諸解釈間の対立）

「社会参加仏教の可能性を問うには、アジア社会の現実から問いを発し、論を組み立てねばならない」（ｘiv頁）。編者たちはそう述べる。また、「アジア諸国の政教関係の基礎情報を提供し、加えて政教関係のコンテクストをふまえ、社会参加仏教の考察を試みる」（同）、と本書のテーマを簡潔にまとめている。

こうした特徴を持つ本書が、二人の評者によってどのように評価されたのか。また、評者たちからの問いかけに、編者たちはどのように応えたのか。以下、その記録をご覧いただきたい。

最後に、充実した原稿をお寄せいただいた評者と編者の方々、また、当日、ご参加いただいたみなさまに心より感謝申し上げたい。